

大垣市金生山化石館

化石館だより

コラム

生きている化石 オウムガイ

海辺のお土産屋さんや水族館の売店で、直径20cmほどの白く艶のある殻に茶色の縞模様のある巻貝様の貝殻を見かけることがあります。これはオウムガイの殻で、大きい割には殻が薄く、とても軽いものです。殻の内部構造が見えるように裁断されたものも販売されていますが、殻の内部には三日月形の小さな部屋がたくさんあり、巻貝のように単純な筒状ではありません。

オウムガイはイカやタコと同じ「頭足類」に属する生物です。緩く巻いた殻の太くなった殻口部分に体をひそめ、殻口からは約90本もの触手を伸ばしています。触手の下の漏斗と呼ばれる器官から水を噴射して進みますが、素早い動きは苦手なようです。南太平洋からオーストラリア近海の水深100mから600mの深海に生息し、現生種は6種類が知られています。死後、オウムガイの貝殻は海流に乗って日本の海岸に流



図：HP「つばめ・ミュージアム」より

れ着くこともあり、ビーチコーミングの愛好家にはお宝の一つです。オウムガイは、リンネによって *Nautilus pompilius* (ノーチラス ポンピリウス) と命名されました。ノーチラスはギリシア語で舟とか船乗りを意味しますが、あの「海底二万哩」に登場する有名な潜水艦「ノーチラス号」の名前はここから付けられたようです。和名の由来は諸説ありますが、殻の形がオウムのくちばしに似ているというのが一般的です。

オウムガイの祖先は4億5000万年から5億年前に出現し、古生代を通じて大いに繁栄しました。古生代の前期、オルドビス紀やシルル紀には、殻が巻かずに真っ直ぐに伸びた形のオウムガイが多く、直角貝とかオーソセラスと総称されています。直角貝は世界各地の石灰岩の中から発見されており、石材として利用されるので、デパートやホテルなどで目にすることがあります。産地としてはスカンジナビア半島南部のものが有名です。また、化石の一部を削り出してペンダントとして利用されることもあります。古生代の海では、オウムガイの仲間は捕食者として優位にあり、三葉虫などを食べていたようです。

古生代の後期には殻が巻いたものが多くなります。そして、これ以降大きく変化することなく現在に至っているため、いわゆる「生きた化石」の一つに数えられているのです。

金生山からは、オウムガイの化石として、シーロガステロセラス・ギガンテウム (Ceologasteroceras giganteum) とコニンキオセラスの仲間 (Koninckioceras sp) の2種が報告されています。赤坂石灰岩の堆積したペルム紀は、オウムガイの仲間が繁栄していた時期ですから、もっと多くの種が見つかって不思議ではないと言われていますが、稀産で標本数も少なく、残念ながら研究は進んでいません。化石収集家の中には、未発表のオウムガイを採取された方もいるようで、数種類の存在が知られています。今回の企画展「金生山の大きな貝化石」で展示している標本もその一つで、タイノセラスの仲間と思われる標本には殻の表面に大きな突起列があり、金生山では大変珍しいものです。



直角貝の仲間は日本からはあまり知られていませんが、岐阜県副地のデボン紀の地層から、50cmにも達する大型の化石が採集されています。金生山からも直角石の化石がいくつか発見されていますが、オウムガイ同様稀産です。



お知らせ



ユウスゲが咲き始めました

金生山化石館の北側にある斜面には、ユウスゲが自生しています。明星輪寺へ向かう参道沿いに僅かに自生していることは知られていましたが、斜面に群生していることは知られていませんでした。岐阜県の西濃地域では唯一の自生地ですが、年々衰退しており、自生地を保護しようと大垣市が天然記念物に指定し、保護団体も活動を始めました。

ユウスゲは、ユリ科キスゲ属 (ワスレグサ属) の多年草で、近縁のニッコウキスゲは良く知られています。ユウスゲは、名前のように夕方に咲き始め翌朝には閉じてしまいます。レモンイエローのきれいな花で、

芳香があります。7月から8月にかけて咲きます。

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)

Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp